

17. 白山郷開拓団について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4976

17. 白山郷開拓団について

杉 浦 文

- I. はじめに
- II. 満蒙開拓団と亜州白山郷開拓団について
- III. 鳥越村の遺族会
- IV. 鳥越村の中国との交流
- V. 考察
- VI. おわりに

I. はじめに

鳥越村のような山あいの村から、かつては国家プロジェクトであった満蒙開拓団が出ていたという話を耳にした。そのとき、なぜ満蒙開拓団が鳥越村から輩出されたのか、そしてニュースやメディアで見聞きするように、鳥越出身の人たちもかの地で集団自決を遂げたのだろうか、といったことを、まず疑問に感じた。

そして現在、鳥越村の人々は、自分達の村から満蒙開拓団を輩出したということをどのように受け止め、どのように次世代に伝えようとしているのかを知りたいと思った。

満蒙開拓団については、悲惨な死を遂げた人々、中国残留孤児というイメージが圧倒的に強く、テレビや新聞などで目にするものも、中国残留孤児に関する事柄や、その当時の生活の様子や、敗戦後の経緯などを扱ったものが多い。そんななかで、開拓団を輩出した村の様子や現在の取り組みなどに焦点をあてたものは、意外に少ないように思われる。この白山郷開拓団の足跡と、その後から現在にかけての鳥越村の遺族会や慰霊のための活動、中国との交流活動などを通じて、人々の意識の変化を追ってゆく。

II. 満蒙開拓団と亜州白山郷開拓団について

白山郷開拓団の正式名称は、入植した地名をとって亜州白山郷開拓団という。鳥越村を中心に吉野谷村、尾口村、河内村の4カ村が集まって組織された開拓団であった。

鳥越村がなぜ白山郷開拓団の中心母体となったのかについては、人口増加とそれにもな

う食糧難、生活苦がその背景にあったと考えられる。尾口村、吉野谷村など白山麓の他の村は比較的耕地が多く、白峰村では林業などの他産業がある程度順調に発展していたが、鳥越村では、人口増加速度に見合った産業が発展することはなかった。もともと少ない耕地を財産相続で分割するなどして、土地はさらに細分化され、分家した農家の次男・3男は苦しい生活を強いられていたという。不況のために鳥越村は1934年経済更正村に指定され、満州分村計画を進めることが決定された。

おりしも1932年、満州国の建国が宣言され、中国東北部に満州傀儡国家が誕生していた。日本政府は日満議定書をよりどころに大量の日本人を満州に移住させ、開拓によって食糧を増産し、難題となっている人口問題と食糧問題を一気に解決しようとはかった。1930年代前半の時期は、日本にいても前途が見えない人たちを中心に大陸に渡るものが増え、移民熱が急速に高まりだした時期でもあった。

一方関東軍は屯田兵移民の計画案を練り上げ、農具だけでなく小銃や機関銃を持たせて広野を開拓させ、いったん戦時に突入したときには、いつでも出撃できる体制を整えた。これは抗日中国人の防御のほかに、国境を接するソ連が万一攻撃してきた場合の戦闘を目的としたものである。満州移民が本当の意味の国策として確立されたのは1936年夏であり、翌1937年から本格的に大量移民がスタートした。この国策にそって、白山麓でも鳥越村を中心に分郷計画が進められた。白山麓では、鳥越村から210戸、吉野谷村・尾口村・河内村各30戸の計300戸が目標送出戸数として計画された。当時の鳥越村村長がこの計画を積極的に押し進めたと言われている(藤田1989 p.14-15)。

ここで特徴的なのは、同じ県、同じ町村を単位にしていることで、日本に母村を置き、あふれた人口を集団で満州に分村させるというやり方である。これだと家族そろって渡満できるし、村の氏神も分霊して持っていくことができる。

また、満蒙開拓団とは別に、義勇隊開拓団というものも存在した。これは1937年にできた満蒙開拓少年義勇軍制度に基づくもので、16歳から19歳までの男子を対象に、訓練所で3年間訓練した。開拓地に敗戦時の在籍数は22,000人だが、一時は45,000人を数えている。ここで訓練を終えた義勇軍は、300人程度の中隊単位で義勇隊開拓団として独立、移行していった(同上 p.14-15)。

白山郷では、満蒙開拓青少年義勇軍という名称の義勇隊開拓団が組織されており、チチハル郊外の白山郷開拓団の隣接地に入植していた。鳥越村からは50人程度が参加した様子であるが、はじめの2～3年に集中し、1941年以降、鳥越村からの参加者はほとんどなかったとのことである。

この亜州白山郷開拓団の先遣隊がはじめて出発したのは、満蒙開拓が国策として強力に押し進められはじめた1937年の第6次開拓団でのことである。翌年の第7次では4人が、さ

らにその翌年には本団約 500 人が満州に渡った。場所は、満州国の中心都市のひとつであったチチハルの南西 50 キロほどのところにある亜州屯地区であった。チチハルには東本願寺のチチハル別院があり、近郊から多くの人々が訪れていたということである。気候は厳しかったが土壌は肥沃で、開拓は順調に進んでいたという。

図1 亜州白山郷開拓団位置図



出所: 藤田 1989

しかし、1943 年頃から成年男子が召集されるようになり、耕作のための人手が足らなくなるにつれ、生活が厳しくなっていた。この時期、南方戦線は敗戦に次ぐ敗戦で、大本営は満州に駐屯していた関東軍 75 万の兵力を次々に南下させ、その穴埋めに満州各地の開拓団の働き手を召集して、戦線に送り込んだ。満州の開拓地には女子供、老人だけが取り残されていた。

同年 8 月 9 日未明、ソ連軍の攻撃により関東軍は新京以北を切り捨て、続いて 12 日、関東軍の報告に基づき、満州を放棄した。これにより満州はまったくの無政府・無防備地帯となったのである。そして 1945 年の敗戦後、労働力として働いていた中国人や公共財産の引渡しなどを求める中国側の治安警察や民衆が白山郷開拓団入植地に押し寄せ、8 月 27 日、全員が本部国民学校に集まり、開拓団幹部が校舎にガソリンを撒いて火をつけ、開拓団員 350 人あまりが亡くなった。このときの様子については、『鳥越村史』にその詳細が見える。

敗戦とともに原住民の動きが不穏になり、たちまち大混乱に陥った。8 月 26 日、第二部落が原住民に襲撃され 20 人の尊い命が奪われた。次いで翌 27 日、開拓団の全員が本部国民学校に集まり自害して果てた。チチハルまで逃れたものわずかに 15 人であったという。まったく言葉に表せないほどの悲惨な結末であった。入植以来 7 年余、築き上げた開拓村は一瞬のうちに無に帰したのである（『鳥越村史』 p. 473）。

Ⅲ. 鳥越村の遺族会

1. 遺族会の構成

石川県内の他の市町村が敗戦後に上部組織からの働きかけで遺族会をつくったのに対し、鳥越村はそれ以前から遺族会結成の動きがあったという。1945年、鳥越村の職員であった覚元利平氏の熱心な働きかけにより、遺族同士の連携を深める組織として鳥越村遺族厚生連盟が発足した。翌1947年には上部組織である日本遺族会・石川県遺族連合会が結成され、鳥越村遺族厚生連盟も、年金を与えてくれる国に対し、様々な働きかけをする団体として鳥越村遺族会と名称を変更した。青年部と婦人部からなっていたが、現在は遺族会の下部組織として、婦人部のみが存続している。任期4年の役員は理事15人、監事2人で組織され、4月の総会の議題などを話し合ったり、慰霊行事の実行・運営を担当する。

終戦57年目に入り、その当時の戦没者の家族も高齢化が進んでいる。すでに亡くなっている会員も少なくない。会員の人数は現在115人であり、会員の平均年齢は、現在では80歳以上なのではないかとのことである。むろん若い人もいるが、同じ遺族会会員でも、実際に肉親が戦争でなくなっているという人と、直接に関係のない人とは、慰霊や遺族会の活動に対する意識の違いが見られるということである。

また、開拓団員として満州に渡ったのは農家の次男・3男が多かったということも、慰霊に対する意識の差になってあらわれているという。開拓団員輩出の際、本家は長男が継いで鳥越村に残り、次男・3男が分家という形で満州に渡ったケースが多いとのことである。そのため、現在遺族会に入会しているのはその本家の長男ということになるが、「あれは分家だから」ということで、本当の家族ではないという認識があるようである。

遺族が亡くなると、その家族が遺族会会員を引き継ぐかたちになっているが、祖父母が遺族会会員でも、その息子や娘、孫へと代が下がるにつれて、戦争への意識や記憶も薄れてゆくと、遺族会のA氏(70歳代の男性)は言う。遺族会会員が亡くなったのを機に、「うちはもうご遠慮させていただきます」と脱退する家族もあるということである。

戦没者の遺族に対する年金とは別に、軍人恩給制度というものがある。1年に3万円程度が給付されている。戦争で夫を亡くした妻、もしくは兄弟姉妹に給付される。

しかしその子供には給付されないというきまりがある。この年金は、実際には家の墓の管理などに使われることが多いそうだが、この規則のため、鳥越村に在住して実際に墓の管理をしている本家の長男長女には給付されず、鳥越村外へ移住した他の兄弟姉妹に給付されることになる。親戚同士でも、このような軍人恩給を巡るトラブルも少しずつ起きているとのことである。

また、遺族会と国政との関わりにも問題があるとA氏は言う。

国政選挙があるたびに、遺族会会員も選挙活動に参加する。具体的な活動内容は、家にポスターを貼る、講演会に参加するなどがあげられる。組織固めのための活動のひとつであるが、一方で、支持の欲しい政治家に利用されているのではないかという懸念もあるという。

靖国神社参拝問題も、遺族会では重要な議題のひとつである。これについては、8月15日という日に対する個人の思い入れの問題であり、個人個人で意見が違うため、意思統一するのはなかなか難しいとのことである。

2. 遺族会の活動・年中行事

鳥越村遺族会として、慰霊祭を毎年8月10日前後に、鳥越村上野にある社会福祉センター横の慰霊の広場にて行っている。現在では、地元の中学生に弔辞を読んでもらい、小学生に慰霊碑への献花・献水と国旗掲揚を任せるなど、若い世代もその式次第の一端を担っている。小学生は10人程度、中学生は1人参加している。全体としての参加人数は、一般の人々と遺族会会員をあわせて150人程度である。

鳥越村遺族会の研修会は秋に行われる。行き先はここ2～3年は温泉が多いそうである。

外部主催の年中行事としては、4月と10月に石川護国神社での例祭、6～7月下旬に石川郡主催の慰霊祭、7月下旬に石川県主催の慰霊祭がある。これらの慰霊祭には都合のつかない人をのぞいて、全員が参加するそうである。

鳥越村にある戦没者のための慰霊の碑は、「中心になるものが必要である」との遺族会役員の声を受けて、前述の覚元利平氏の呼びかけにより、1950年夏、鳥越城跡に建立された。地理的に鳥越村の前身である旧3カ村のほぼ中心に位置していたというのが、建立地を決定する際の決め手になったそうである。しかし、1990年から行われた鳥越城の発掘・保存整備事業にともなって鳥越村上野の福祉センター横に移築し、その際鳥越村出身の彫刻家である山下春子氏に水を使ったモニュメントの作成を依頼した。現在その右隣にある戦没者名を刻んだ碑は、村民からの篤志により慰霊の碑移築と同時に追加して建てられたものである。

この名簿には、戦没者の氏名、戦没年月日、当時の官等級、戦没場所、出身集落名（別宮、杉森、阿手など）が記載されている。なお、この名簿は『鳥越村史』にも同様のものが20ページに渡って掲載されている。「戦没者名簿はただの名前の羅列ではない。その人がどこでどのようにして死んだのかがわからなくては、戦没者名簿としての意味がない」とA氏は言う。

また、A氏はこの名簿碑を通じて、若い世代への戦争についての教育の方向性も明らかにしている。戦争についての教育は、ただ教科書で、たくさんの人が死んだのだという知識を得るだけでは、本当の社会教育にはならない。この名簿碑を見て、アジアや中国東北部の地図でその場所を探し、「鳥越の人はここで死んだのだ」というように、教育の場面で活用して欲しいとの思いがあったという。

また、子供達が体験として戦争の話を受け継いでゆくには、ただ戦争体験の話を書くという受け身の活動だけでなく、実際に子供達が行動し、体験することが大切である。新たな出発点として、子供達を慰霊祭に参加させることで、新しい視点から見た慰霊行事を行っていくのが最も大切なことだと、A氏は言う。

慰霊に関する活動は鳥越村遺族会が公的な最小単位であり、集落というまとまりで特別に慰霊活動を行っている集落はない。さらに小さい単位では各家庭での慰霊行事ということになるが、慰霊行事というよりは法要といったニュアンスが強い。また開拓団員を直接知る家族も少なくなったのに加えて、すでに戦後57年が経過しており、法事の一応の区切りとされる50回忌も既に済んでしまっているため、遺族会会員のお宅でも、戦没者に対する意識・記憶の面に関しては過去の話となりつつあるようである。

また遺族会の果たす役割や存在意義も徐々に変化しつつある。発足当初は、戦後の混乱の中で、国に対して補償を求める窓口となっていたが、遺族会メンバーの高齢化や所得増加にともなって、慰霊行事を行うための機関という色合いが濃くなってきた。市町村合併の動きにしたがって、鳥越村遺族会では、慰霊行事や慰霊の碑の管理を他村と合併しようとの考えもあるということである。

IV. 鳥越村の中国との交流

1. きっかけ

鳥越村の当時の村長は、冒頭でも述べたように、開拓団政策を強力に支持し推進した人物であった。その結果、亜州白山郷開拓団の悲劇が起こったことを考えると、政治・行政は脈々と受け継がれていくものだから、行政は過去の非礼の責任をとり、後始末をする責任があるというのが、現職板倉武雄村長の考え方である。板倉村長は集団自決の話聞き、「貧しいがゆえに満州へ渡り、その結果こうなってしまったのか」と、非常に残念に思ったとのことである。

板倉村長が石川県庁につとめていた頃、開拓団のあった富裕県で集団自決の惨劇の跡地を目の当たりにした。チチハル郊外一帯は草原地帯であり、亜州白山郷開拓団の跡地を発見するのは困難であったそうである。板倉村長は、鳥越村からでた亜州白山郷開拓団員が自決した地を明らかにしたいとの思いから、中国と日本の友好関係のために県庁職員時代から尽力してきた。反日的な現地の人々や自治体を説得し、徐々に友好を深め、1997年7月ハルビン郊外に日中友好記念碑を建立、1999年、チチハルに日中友好の碑・集団自決した亜州白山郷開拓団の慰霊碑建立にこぎ着けたとのことである。

鳥越村遺族会では、中国政府のバックアップを得て、鳥越村出身の開拓団員の慰霊のためと、現地住民への陳謝の意を表明するため、中国東北部と現地を訪れている。2000年までは板倉村長を団長とし、鳥越村が主体となってやってきたが、2001年は遺族会が主体となり、村長は顧問というかたちをとった。財政的にも厳しく、内容も行政レベルでできることの範囲を超えているためである。参加者は希望者のみで、遺族会メンバーというよりは、開拓団員の子や孫、もしくは近親者がほとんどであった。2000年のスケジュールは、まずチチハルへ赴いて慰霊行事を行い、その後西安にて観光をするという形をとっている。イレギュラーなかたちで亡くなった人たちへの弔いと供養のためといったニュアンスが強いようである。

表1 鳥越村友好訪中団日程表 (2000年)

月 日	都 市 名	摘 要
10/10(水)	新潟→ハルビン→チチハル	鳥越村出発、新潟より空路ハルビンへ到着後、列車でチチハルへ
10/11(木)	チチハル→富裕県→チチハル	終日、チチハルより富裕県へ慰霊事業、実験小学校訪問など
10/12(金)	チチハル→ハルビン→西安	早朝の列車でハルビンへ 午後の飛行機にて西安へ
10/13(土)	西安	秦始皇帝兵馬俑、華清池、碑林博物館など
10/14(日)	西安	西門、大雁塔、陝西歴史博物館など
10/15(月)	西安	青龍寺、興教寺など見学
10/16(火)	西安→大連	乾陵、陽陵など見学 午後の飛行機にて大連へ
10/17(水)	大連→富山	大連より富山へ帰着、鳥越村へ

出典: 社会福祉協議会発行資料より一部抜粋

中国訪問の費用は、5割が村からの助成金、4割が個人負担で、その他は遺族会の負担でまかなっているとのことである。

これからも慰霊のための中国訪問は継続してゆく予定であるが、これでもう5回目を数え、「もう十分ではないか」という声もある。遺族会としても、遺族会会員の高齢化や経費の問題が出てきているという。そこで鳥越村遺族会では、今後は白山郷開拓団輩出母体である吉野谷村、尾口村、河内村と鳥越村の4カ村の遺族会の合同で中国を訪問できないかという方向で考えているとのことである。

2. 交流の拡大

遺族会が中国東北部に正式訪問をはじめてから5年が経つ。亜州白山郷開拓団の慰霊を目的として始まった中国訪問は、現在では中学校や小学校の交流にまで発展している。

板倉武雄村長は、毎年黒龍江省チチハル市郊外の富裕県実験小学校を訪問し、ビデオカメラや電子オルガンを贈呈するなど、中国東北部での交流も盛んに行っている。板倉武雄村長は、その熱心な日中友好活動貢献を認められて、昨年10月に同小学校の名誉校長の称号を贈られている。

また、「鳥越村少年のつばさ」という名称で行われている南京にある南京大学付属中学校と鳥越の中学生の交流行事も、2002年で7年目を迎える。夏休みに生徒達が中国へ行ったり、逆に付属中学校の生徒が鳥越村を訪問するなど、様々な交流活動を行っている。南京大学付属中学校と鳥越村中学校は2001年に「友好校」として調印し、そのつながりを深めている。

交流行事には派遣と受け入れの双方向の行き来がある。鳥越村から中国へ派遣される中学生は20~30人程度で、鳥越中学校の生徒の中から希望者を募っている。夏休みのお盆明けに5泊6日で中国を訪問し、付属中学校生徒との交歓会、交流会、家庭訪問などのほか、北京での史跡や博物館の見学もスケジュールに組み込まれている。

受け入れの方は、2002年で3年目を迎える。毎年、夏に行われる一向一揆祭りに合わせて南京大学付属中学校から生徒3人と引率2人ほどが鳥越村を訪問しているとのことである。

一向一揆祭りのイベントのひとつである盆踊りや灯籠流しへの参加、鳥越の中学生との交歓会、ホームステイ、金沢市の史跡見学などがスケジュールに組み込まれている。

実際に中国に行った中学校生徒の感想には、「とても楽しく、有意義だった。中国に行って中国の友達と交流を深められただけでなく、中国の資料館や博物館の見学を通して、戦争の悲惨さを知ることができた。このような行事はこれからもどんどん続けていって欲しい」との声をきくことができた。

この「鳥越村少年のつばさ」は、国際的な視野を持ち、異国の生活や文化に触れながら交流と友好を深め、郷土の姿を正しく理解するという目的を持って行われている。しかし2005年までに完了される予定の市町村合併に伴い、これまで村単位で行われていた交流行事がどのように変化してゆくのかは、まだまだ不透明な状態である。

しかし板倉村長は、中国と日本の、お互いの心を知りあう機会として、このような小学校、中学校の交流を継続していきたいと話している。

V. 考察

石川県では、白山郷開拓団の他にも、班代町野郷開拓団（母村：現輪島市）など13の開拓団と2つの義勇隊開拓団を輩出している。そのなかでも鳥越村を中心母体とする白山郷開拓団は、敗戦後の経緯などから見て、満蒙開拓団のもっとも典型的なケースのひとつである。では、鳥越村で、満蒙開拓団を輩出したことはどのように受け継がれ、語られてきたのか。そして、将来に向けてどのような取り組みがされているのだろうか。

鳥越村内での遺族会の活動においては、戦争の記憶を子供達に伝えたいという取り組みも積極的に行われており、次世代に戦争の記憶を伝えてゆこうとする人々の前向きな姿勢が見えてくる。実際に、鳥越村遺族会主催の慰霊祭で、戦後世代の中学生の弔辞を聞き、A氏は新鮮な感じを受けたという。このことをお伺いし、慰霊祭への児童生徒の参加は、双方にとって刺激になるよい機会であると強く感じた。

鳥越村、吉野谷村、河内村などの白山麓の各村では、今後ますます高齢化と過疎化、少子化が進むことが予想される。全国的に見ても、「戦争を知らない子供達」は、日本の人口の70%以上にのぼっている。そのなかで、このような取り組みは非常に重要かつ貴重であると思う。開拓団を輩出したことで、村内での戦争の記憶が長続きした一面があるのだと考える。その意味で、特に鳥越村は若い世代に戦争や開拓団の歴史を伝えやすい環境にあると言えるのではないだろうか。

近年、村民のなかで戦争の記憶は薄れつつあり、特に若い世代や遺族会会員以外の村民にとって、戦争や満蒙開拓団というものは文献やメディアを通して知るのみとなっている。遺族会の活動も高齢化が進むなかで縮小しつつあり、訪中も関係者のみでの法要といった感じで、村民全体での参加はない。遺族会会員以外の村民の方が慰霊行事に参加する機会は、ほとんど慰霊碑等建設のための寄付を集める場合のみであるといつてよい。

A氏から、戦争の記憶は決して忘れてはならないという信念に基づいて、学校教育に白山郷開拓団のことを取り入れてほしいとの思いから、戦没者名簿を建立したとのお話をうかがった。アジアの地図を広げて「鳥越の人はここで亡くなったのだ」という風に使ってもらえるようにと、氏名、階級、戦没地、戦没年月日、遺族の氏名までを詳細に記録している。

鳥越村上野にあるこの慰霊の広場は、石川県内の各市町村にあるどの慰霊碑や忠魂碑にもひけをとらないほど立派なものである。「身内に開拓団員がいた人といない人とでは、中国訪問や慰霊活動全般に対する意識に多少の温度差がある」とA氏は語ったが、この「慰霊の碑」を建立するにあたって、広く村民全体から寄付を集めた際には、皆快く承諾してくれたとのことである。このことから、戦没者を哀悼し、慰霊の心を大事にしたいという人々の気風の根底が見えてくるように思う。

しかし、中国訪問については、板倉村長が言ったように、単なる後始末にとどまらず、現地校との交流など、その幅が徐々に広がってきていることに注目すべきであろう。

また、白山郷開拓団に関する活動は、鳥越村が主催しているばかりではない。石川県教育文化財団では、来年にも「亜州白山郷開拓団史（仮称）」を発刊する予定で、現地の人々や開拓団の生き残りの人々の証言を調査しているとのことである。

VI. おわりに

2002年3月21日、北陸朝日放送で、ドキュメンタリー「大地の記憶」が放送された。これは、前述の石川県教育文化財団の聞き取り調査の際、北陸朝日放送の撮影スタッフが同行し撮影したものである。これまで私があたることのできた資料のうち、白山郷開拓団の最後について記した資料は『鳥越村史』のみであり、敗戦から集団自決に至るまでの経過の詳細を知ることができ、興味深い資料となった。

歴史を語る人間がどの側の人間であるのかによって、その語られ方も様々に変化する。放送では、現地の人々の証言と開拓団の生き残りの方々の証言が食い違っており、『鳥越村史』においては、中国人の方々を指して「原住民」という記述があった。これはそのような視点の違いを示すものであろう。石川県教育文化財団でも、開拓団の生き残りの方々の悲惨な経験ばかりをまとめるのではなく、現地の中国の方々の証言もあわせて掲載する予定とのことである。

戦後57年が経ち、開拓団に参加したという人はもちろん、当時の様子を知る人も少なくなった。日本と中国の間でも、人や物の行き来がより盛んになり、お互いのわだかまりも徐々に解けてきているように思われる。

しかし、日本でも中国でも、50年以上前に負ったおのおのの傷跡を少しでも埋めようとする努力は未だ続けられている。今回の調査で、中国訪問、遺族会の取り組みや将来への展望、関係者の方々の意気込みなどをお伺いし、そのことを身近に感じることができた。そして、単なる後始末にとどまらず、そこから理解を深め、交流を広げてゆこうとする人々の取り組みを見ることができたのが、今回の最大の収穫ではないかと思う。